

研究ノート

「故郷」への投資—ラージャスターンの商業町と移動商人マールワーリー

中谷 純江*

Investing in “Home”:

Marwari Mobile Merchants and their Native Towns in Shekhawati, Rajasthan

NAKATANI Sumie

Abstract

The Marwaris are renowned all over India for having emerged in the nineteenth century as the most prominent group of traders. Pursuing business opportunities, they migrated from their native places in the princely states of Rajputana, which was not under direct colonial rule, to towns and cities in British India where they made substantial gains from trade, banking, and commerce. The fortunes they made abroad were sent back to their native towns and utilised in various symbolic investments, such as building construction and philanthropic projects. In each town of Shekhawati there are many havelis (mansions), public wells, temples, memorials, schools and hospitals, constructed and donated by Marwaris. Based on fieldwork conducted in Churu, a business town in Shekhawati, this paper will discuss how Marwaris have kept in touch with their native places after migration and why they invested in the houses and towns they had left. By situating the Marwaris in the historical context of their native town, the meaning of ‘homeland’ for diasporic mobile merchants will be explored.

要旨

本稿はラージャスターンを出自とする移動商人、マールワーリー¹⁾にとっての「故郷」の意味、その役割について論じる。インドで最も成功したビジネス・コミュニティとして知られるマールワーリーは、19世紀に姿をあらわした。彼らはビジネス機会を求めて、ラージプターナー（現ラージャスターン）の藩王国を離れ、英領インドにある町や湾岸都市に移住し、交易や金融取引や商売に従事して莫大な利益をあげた。マールワーリーの成功は、植民地の経済と強く結びついており、イギリスの商業的拡大を支えた。移住初期には、家族をラージャスターンに残した単身男性が主流であったが、20世紀になると家族全員が都市へと移った。しかし、その後も離れた故郷に対して、彼らは多額の投資をおこなってきた。なぜそしてどのように故郷との関係を保ち続けてきたのか、移動商人にとっての「故郷」について考察する。

* 鹿児島大学国際連携推進センター准教授

- ・ 2010、「職人の支援と文化遺産の保護——インドにおける手工芸開発の変遷」、『地域研究』、10-2、143-163頁。
- ・ 2009、「新しいコミュニティ祭礼の出現——ラージャスターン農村におけるラームデーヴ信仰と巡礼」、『南アジア研究』、21、60-86頁。

なお、本文中の写真はすべて筆者が撮影したものである。

1. はじめに

「マールワリー」の名は、商業移民として19世紀に全インドで知られるようになった。植民地下でイギリスとの交易や仲買業に従事して富を築き、20世紀初頭に近代産業に参入した。いくつかのマールワリー商会は、巨大な財閥へと成長をとげ、マールワリーは今日までインドを代表する豊かなビジネス・コミュニティの1つと見なされてきた²⁾。多くの先行研究は、マールワリーが著しい経済的成功をおさめた理由に注目してきた。金字塔ともいえるティンバークの研究は、インド近代産業におけるマールワリーの強さの秘密を、移動の歴史や経済活動のタイプ、経済組織の分析から論じた[Timberg 1978]³⁾。また、マルコヴィツの近年の研究は、出身地ラージャスターンとのつながりや支配者ラージプートとの関係を移住先の商売に利用してきたことを指摘した[Markovits 2006]⁴⁾。

これら先行研究がマールワリーの経済活動や組織に、つまり稼ぐ方法や能力に注目してきたのに対し、本稿は消費の側面を見ることで、マールワリーが地域社会に対し自らをどのように提示しようとしたのか、表象やアイデンティティの問題にアプローチする。マールワリーのアイデンティティについて、近年ハードグロヴが、カルカッタにおけるコミュニティの形成過程の分析にもとづいて興味深い議論を行っている[Hardgrove 2004]。移住先社会との関係でマールワリーを捉える彼女の議論に対し、本稿では出身地とされるラージャスターン商業町にマールワリーを位置づける。なぜなら彼らのアイデンティティや表象は、「故郷」と密接に結びつき、「故郷」との関係によって規定されてきたためである。マールワリーは移住後どのように故郷との関係を保ってきたのか？なぜ離れた故郷に投資してきたのか？ラージャスターンの商業町と移住先カルカッタで実施したフィールド調査にもとづき、マールワリーにとっての「故郷」の役割、その意味について考察する⁵⁾。

以下につづく第2章では、マールワリーとはどのような集団をさすのか、そして、彼らはいかにして最も成功したコミュニティとなったのか、先行研究をもとに整理する。第3章では、シェーカーワティー地域の商業町チュールーを取り上げて、商人と支配者との関係を軸に商業町の歴史を記述する。これにより、商人家族が町を離れるまでの商業町と商人との関係を明らかにする。第4章では、商人が商業町を離れた後に、「故郷」に対して行った投資について論じる。中でも巨額な資金を注ぎ込んだハヴェーリー邸宅を取り上げて、その機能の変化を明らかにする。商人邸宅の機能の変化は、商人と商業町との関係の変化を表している。最後に、移動商人にとっての「故郷」が定住者とは明らかに異なる点について論じる。また、商人と「故郷」との近年の関係について述べ、まとめとする。

2. マールワリーとシェーカーワティー地域

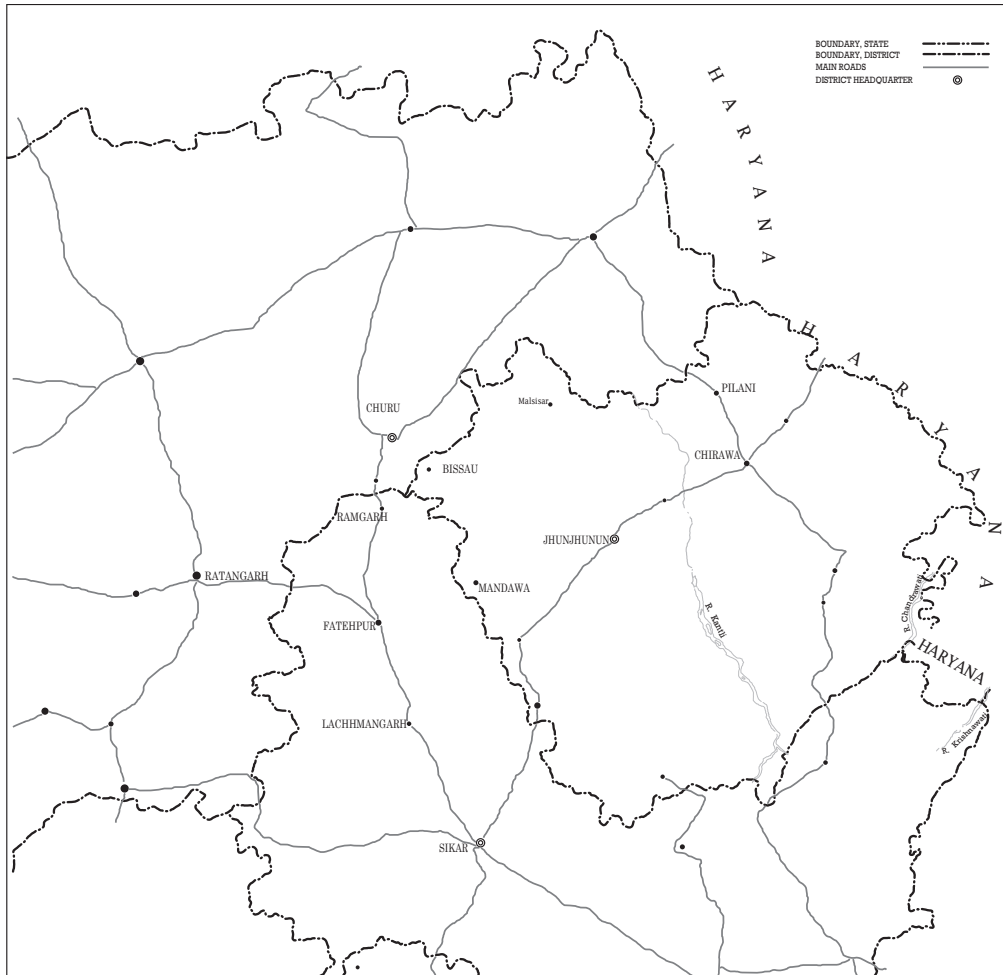
「マールワリー」は、ラージャスターンから東インド、特にカルカッタに移住した商人につけられた呼称であり、内部に様々な商業カーストが含まれている。カースト名では、アグラワール

(Agrawal), オースワール (Oswal), マヘーシュワリー (Maheshwari) が多数派を占める。『インドの人々』及びギヤザティアーによれば [Lavana et. al 1998; Sehgal 1970]、アグラワールには、ヴィシュヌ派ヒンドゥー教徒が多いが、14%程度のジャイナ教徒も含まれる。彼らは現ハリヤーナー州ヒサル近郊のアグローハーという地に出自を持つとされる。オースワールはスヴィタンバル派のジャイナ教徒で、ジョドプル県オシヤーンを出自とする。マヘーシュワリーはビーカーネール県やジャーサルメール県などラージャスターン西部に多く、シヴァ神を信奉するラージプートを祖先とすると語られている。カandelワール (Kanderwal) には、ディガンバル派のジャイナ教徒が多く見られる。各々のカーストは内婚単位を形成しているが、商売の慣習や衣食住などの文化を共有している。宗教の境界はあいまいで、ジャイナ教徒とヒンドゥー教徒の通婚も見られる。

「マールワリー」と称される人々には、ラージャスターン各地の出身者を含んでいるが、カルカッタや北インドへ移住した人々には、シェーカーワティー地域の出身者が特に多い。デリー、ジャイプル、ビーカーネールの3都市を頂点とする三角形の中にシェーカーワティーは位置し、ジュンジュヌー県、シーカル県、チュールー県の3つが含まれる。この地域に点在する小さな商業町から、後にインド経済を牽引する巨大産業資本家の多くが輩出された(地図1, 2)⁶⁾。



地図1：Position of Rajasthan in India 2001 ([Modi 2005: 3] をもとに著者作成)



地図2 (著者作成)

マールワリーの最も初期の東インドへの移住は16世紀までさかのぼるが、シェーカーワールティからカルカッタやボンベイへの確固とした移住の流れは、1820年代から始まった⁷⁾。当時の移住者の手記には、運を信じて徒歩やラクダで、あるいはガンジス川をボートで命がけの旅をしたことが記されている⁸⁾。1860年代にデリー・カルカッタ間の鉄道が開通すると、移住は容易になり加速された。シェーカーワールティ各地の商業町は、英直轄領でのマールワリー・ビジネスの人材供給地となった。ティンバーグによれば、シェーカーワールティからの移住者は、最初は同胞が経営する会社の事務員や仲買人や代理人として仕事を始め、まもなく自分の商売へと移っていった。ラムガル出身のポダールが設立したタールチャンド・ガネシャムダースやシンハーニヤールが設立したセーワラム・ラムリクダースのような大会社の存在がマールワリーの集団移住に決定的役割を果たした⁹⁾。

移住の初期段階で同胞の支援をえて、多くのシェーカーワティー出身者はカルカッタで阿片や藍や綿花を扱う貿易業者として活躍するようになった。彼らはフンディーと呼ばれる信用取引システムを用いて、離れた場所に自由に資金を移転することができた。フンディーは現在の為替に相当し、手形の交換や履行はマールワリーのインド中にひろがる信用ネットワークに依存していた[Jain 1929]。英直轄領における土地査定政策の変化やそれにつづく農業の商業化も彼らの商機となった。マールワリー商人は、商品作物を生産する資金を農民に貸し付ける金融業者として、全国各地の農村に進出した。彼らはイギリスの経済的拡大を支え、金融業や商業や投機から巨額の富を稼いだ。

20世紀になると、財を近代産業に投資するようになり、商人から産業資本家へと成長する者が多くあらわれた¹⁰⁾。20世紀初頭の不況期にマールワリーが資本を蓄積し、保持することができた理由について様々な見解がある。ティンバークによれば、マールワリーが土地にそれほど多くの投資をせずに、より危険な利益の多い商売を好んだことが一つの理由である。また、信用取引と情報と労働力の確保に長けていたことも挙げられる[Timberg 1978: 175]。マルコヴィッツは、マールワリー商人が全インド的ネットワークを形成しており、資本や人材がたえず他の地域から供給されていたことを指摘する[Markovits 2006: 145]。

全インドに支部を持つマールワリーの大会社は、多くの場合、本部をラージャスターンの故郷においていた。資本と人材が絶えず本部から支部へと補給され、利益は本部へと送金されて再投資されていた。マールワリーの移住は、ラージャスターンに家族を残し、男性がときどき故郷を訪問するというものであった。各地に散らばった男性にとって、故郷は家族生活と商業ネットワーク両方の中心であった。彼らと故郷との結びつきが資本や人材や情報の全インド的循環を生み出し、それが彼らの強さであった。

1920年代以降になると、家族全員を伴った移住が始まった。その背景には1916年にシェーカーワティー・カルカッタ間の鉄道が開通したことで、女性や子供の長距離移動が可能になったことがある。家族を伴った移住が増える中、シェーカーワティーの商業町と移動商人との関係は変化した。それは彼らにとって「故郷」の意味や役割を変化させることになった。

3. 商業町チュールーにおける支配者と商人の関係

この章では、シェーカーワティー地域の商業町チュールーを事例に、町が形成された16世紀から19世紀後半までの商業町における商人のプレゼンスについて、商人と支配者との関係を軸に記述する。

3-1. 陸上交易の発展と商業町の形成

古くから商業町として知られるチュールーは、東の端をジュンジュヌー県と、南の端をシーカル県と接している。16世紀初頭までは、ジャート農民が支配していた。チュールーという名は、ジャー

ト族長チュハル（Chuhru）の名前にちなんでつけられた。ラトール（Rathor）クランのラージプート、マルデーヴ（Maldev）が1541年にジャート族長を殺害し、彼の支配を打ち立てた。『チュールー郷土史』によれば、1560年頃にチュールーの南36キロに位置するファテールから、最初の商人ポダールとバグラーが入植した。彼らはチュールーの領主サンワルダース（Takur Sanwaldas）に大きな真珠4つを贈与した[Agrawal 1974: 176]。

チュールーは領主クシャルシン（Thakur Kushalsingh, 1694-1730）の時代に要塞街へと発展した。マラターとの戦いから得た報償金で、6つの監視塔と4つの門をもつ城壁が町に建設された。安全が確保されると、多くの商人が近隣の村々から移住してきた。交易路にある商業町として、18世紀中頃に繁栄を極めた様子が『チュールーの郷土史』には次のように描かれている。

チュールーのディガンバル派のジャイナ寺院と「四つ辻の井戸」は、領主サングラームシン（Thakur Sangramsingh）の時代につくられた。その当時、商業や交易はとても繁盛していた。このため町は豊富な税によって潤っていた。（1740年に建設された）四つ辻の井戸は、わずか一日の税によって造られたといわれる[Agrawal 1974: 205]。

チュールーの町には、商人たちの納めた税や寄進による建造物がその他にも数多く残されており、18世紀の繁栄ぶりを知ることができる¹¹⁾。

3-2. 豪商の誕生と商売の全インド的拡大

チュールーの発展を築いた商人の中に、後に最も有力となるポダール家の祖先、バゴティラーム・ポダール（Bhagotiam Podar）がいた。彼は18世紀初頭にパンジャブへ行き、毛織物の商いから富を成した。伝説によれば、ジャイナ教の聖者が彼にパンジャブへ行くように告げたという[Modi 1939 cited in Timberg 1978:138]。バゴティラームの息子のチャタルブージ（Chaterbhuj Poddar）は、毛織物のビジネスを拡大し、チュールーを拠点としてアムリットサル、パティンダー、ヒサルに支店を持つようになった。ポダール家は、毛織物や穀物をパンジャブ地方に輸出する商売で成功し、18世紀の終わり頃に強い影響力を行使するようになった。

豪商ポダールは領主と密接な関係を持ち、チュールー城とポダール家をつなぐ秘密の地下道があったという話が地元に残されている¹²⁾。チュールーは、ジャイプル藩王国とビーカーネール藩王国に挟まれた豊かな商業町であったため、幾度となく領土争いの標的となった。チュールー領主はビーカーネール藩王と同じリネージの出身であり、領主の中でも格が高く、藩王国の直接支配下に入ることを拒み続けていた。このため繰り返し軍隊が差し向けられた。こうした数々の戦いにおいて、武器や弾薬や食料を手配したのが町の商人たちであり、籠城戦においてはポダールの地下道から物品が運び込まれたといわれる。

しかし、1791年のある日、領主シヴシン(Thakur Shivsingh)との間の税をめぐる争いが原因で、チャタルブージは一族をともなってチュールーを出て行った[Cooper 1994: 37]¹³⁾。彼はシーカル領主の協力を得て、チュールーの南15キロに位置する、ジャイプル藩王国の領土に移住し、そこにラームガルという街を設立した。ラームガルはその後、多くの成功した商人をうみだし『豪商の街、ラームガル』という名を馳せたのに対し¹⁴⁾、主要な商人を失ったチュールーでは経済活動が衰退した。1813年にはピーカーネール軍との戦いに敗れ、チュールーはピーカーネールの直接支配下に組み込まれた¹⁵⁾。

3-3. 支配者の交代—在地領主から藩王、そしてイギリスへ

ピーカーネール藩王は、衰退したチュールー経済を立て直すため、ラームガルのポダールをチュールーへ呼び戻した。1823年にポダール一族の中から、チャタルブージの孫にあたるミルジャーマル(Mirjamal, 1790-1848)とナーガーラーム(Nagaram)の兄弟が32年ぶりにチュールーに戻った¹⁶⁾。ミルジャーマルは、北はカシミールから中央インドのマールワーまで、西はムルターンから東のカルカタまで全国各地に支店を展開し、金融、保険、輸出業に従事するようになった。パンジャープ王ラナジット・シン(Ranjit Singh)と密接な関係を持ち、スイク王国の宮廷銀行家も務めた。

チュールーの郷土博物館には、多くの藩王や領主が彼に借金をしていたことを示す証文が残されている。例えば、ピーカーネール藩王スーラトシン(Maharaja Suratsingh, 1765-1828)は、1825年から1827年に3度に分けて合計約800,000ルピーを借り、担保として多くの村々の保有権を差し出した¹⁷⁾。タクネートによれば、ミルジャーマルの絶大な権力を示す資料として、藩王からミルジャーマルに宛てられた以下のような文書も見つかっている。「殺人のような重罪3つまで、ミルジャーマルとその子孫を藩王国は罰しない。屋敷にかくまわれた犯罪者を捕えない」。この当時ピーカーネール藩王は、チュールーを訪れるとポダール屋敷の前に象を停めて、彼の名声を高めていた。ミルジャーマルには徴税権や軍事権も与えられていた[Taknet 1990: 49]。

ポダール家の繁栄は19世紀前半まで続いた。しかし、19世紀中頃からハジャリーマル・コターリー(Hajarimal Kothari, 1812-1878)の一族が影響力を強め、ポダールを凌ぐようになった¹⁸⁾。コターリーは宗教的寄進や公共事業に彼の財を費やしたことで知られており、彼にもポダールと同様に、支配者との争いが原因でチュールーを去ろうとしたという言い伝えがある。

ピーカーネール藩王サルダールシン(Maharaja Sardarsingh, 在位1851-1872)に腹をたてたハジャリーマルはチュールーを去り、ジャイプルへ向かった。藩王はハジャリーマルを宮廷に招待し、金の装飾品を贈って、彼の怒りをなだめようとした。当時、金を身につけることができるのは、高い身分の人に限定されていた。ハジャリーマルは『自分は商人であるため、金の装飾品を身につけることはない』と藩王の申し出を辞退した。藩王はハジャリーマルに許しを乞い、牛車にのせて丁重にチュールーまで送りかえた¹⁹⁾。

コターリー家の屋敷には、このときの牛車の籠が今も保存されている。

19世紀も終わりにになると、バグワンダース・バグラー (Bagwandas Bagla, -1895) の名が知られるようになる。彼はビルマ (現ミャンマー) で材木業と金融業に従事した。ビルマ王家を欺き、イギリスによるビルマ支配を手引きした。そして、その褒美に巨額の財を手にしたと語られている。インド初の百万長者として知られるバグワンダースによって、チュールーの町には公共井戸、火葬場、地域初の近代病院、学校など様々な建造物が創られた。これら慈善事業の功績が称えられて、1894年にバグワンダースは英政府より「名誉行政長官」の尊称を与えられている [Sharma 1988: 116]。しかしながら、ビルマでの悪業のため、彼の一族の男性全員が若くして亡くなったといわれる [Cooper 1994: 137]。彼の未亡人が償いのために、1899年の大旱魃救済として建設した大きな貯水池がチュールー郊外にあり、「豪商夫人の水場」と呼ばれている。

以上のように、チュールーには支配者と商人との関係を語る逸話が多く残されている。支配者の圧政に対する商人の抵抗、町からの移出、支配者の説得による帰還というテーマは、主役の名前を変えながらシェーカーワティー地域各地で聞かれる普遍的な話となっている²⁰⁾。また、チュールー商人の事例から、「支配者」が時代によって変化していることがわかる。すなわち19世紀初頭までは、在地領主と商人との関係が問題であるのに対し、19世紀中頃からは藩王との関係が重要になる。そして、19世紀の終りには、バグラーの話に見られるようにイギリスとの関係が決定的になる。時代にあわせて町の中心的商家と支配者がともに交代している。商人の側からいえば、いかにその時代の権力者と密接な関係を持つかが、経済的成功のカギであったといえる。それゆえ商人たちは、貢物や税や寄進や貸し付けや慈善事業といった異なる名前で支配者との関係をつくるための投資を行っていたと言える。

4. 移住先における成功と「故郷」への投資

前章では、商人が支配者とどのような関係を保ってきたのかを見た。この章では、19世紀後半以降、移住先で成功した商人たちが「故郷」に対して行った投資について論じる。

4-1. 商人邸宅の機能の変化

シェーカーワティー地方の商人たちは、カルカッタやその他の英直轄地で成功をおさめ、19世紀後半には亜大陸の商業を掌握するようになった。まもなく彼らは財をシェーカーワティーの故郷に注ぎ始めた。それらの一部は、邸宅や寺院や井戸や記念碑などの建造物になった。建物には壁画が描かれ、商人たちは隣人と競い合いながら、建築物をより大きく、より派手にしていった。飢饉が町を襲うと、商人たちはさらに多くの資金を街に注いだ [Cooper 1994: 12]。20世紀になると、井戸や貯水池に加えて、時計台、学校、図書館、病院、駅舎、公園などの近代施設が次々にマールワリーによって建築され、寄付されるようになった。

こうした装飾建造物の中で、最も数が多く壮観であるのがハヴェーリー邸宅である。邸宅は古くはラージプート領主のタウン・ハウスとして造られていたが、後に支配者ラージプートから裕福な商人へと建造者が代わった。商人にとって邸宅は、ラージプート支配者にとっての城に相当し、家であり、地位であり、商売の拠点であり、防御の砦であった。

まず、邸宅の家としての機能について述べる。シェーカーワティー地域の典型的な邸宅は、2つの中庭があり、外側の庭を囲んだ公的な空間と内側の庭を囲む家族の私的空間からなる。家族生活の場としての邸宅は、単に居住スペースであるだけでなく、家族の私生活を壁で隠すという重要な機能を持っていた。王族から領主まで、ヒンドゥー教徒であれイスラーム教徒であれ、すべてのハヴェーリー邸宅は女性を隔離する社会習慣を表現している [Wacziarg and Nath 1982: 22]。商人による邸宅建造は、従来は貴族や支配者階級の文化であった女性隔離の慣習を商人コミュニティが厳格に守るようになったことと結びついていた。

次に、商売の拠点としての機能は、外側の中庭を囲んでつくられたバイタク (bhaitak) と呼ばれる応接室が果たしていた。そこが商人のオフィスとなっており、あらゆる訪問者がここを訪れた。当時を回想しながらから 87 歳の男性が筆者に次のように語った。

邸宅の主はバイタクに座り、商売台帳をつけ、小切手をきった。息子たちや若い親族男性や共同経営者は、全国にある支店で商売に従事していた。藩王ガンガーシン (Maharaja Gangasingh 在位 1888–1943) の時代には、外国でもベンガルでも、どこで商売をしようとも、マールワール出身者はマールワールで税をおさめるという取り決めがあった²¹⁾。

各支店の利益はシェーカーワティーに送られ、バイタクで管理され、再投資された。人材と情報もバイタクに集まり、ここを経て各支店へ供給された。バイタクは全インドに広がる支店を統括する本部の機能を持っていた。チュールーの郷土博物館には、ポダール邸宅のバイタクから発見されたムリヤー文字で書かれた商売台帳とペルシャ語で書かれた藩王やイギリス人への手紙が大量に収蔵されている²²⁾。

最後に、邸宅の防御機能についても述べねばならない。クーパーによれば、シェーカーワティー地域の商人邸宅は、19世紀初頭から1930年代の間に造られたものであるが、初期の邸宅は城壁のような外観を持つ(写真1)。1階部分の背が届く範囲には窓が全くなく、壁の上部に明かりとりの小さな四角い穴があげられている。外壁は無地の粗い漆喰仕上げで、邸宅の建物全体が背の高い壁で囲まれている。し



写真 1

かしながら、19世紀も半ば以降になると、外観の装飾に力が入れられるようになる。邸宅の壁にはたくさんの壁画が描かれるようになり、ガラス製の窓の数も著しく増えていった[Cooper 1994: 52-56]。

商人が力をつけ、商人邸宅が派手になっていく19世紀後半のチュールーの状況を窺い知ることができる語りを、ガジュラージ・パラク (Gajraj Parakh) という男性の子孫から聞くことができた。

……ガジュラージはカルカッタで財を築き、90万ルピーを持って彼の故郷チュールーへ戻った。当時の価格では彼の子孫が7世代にわたって食べていくことができるほどの額であった。ガジュラージはチュールー領主に21,000ルピーを贈った。しかし、領主は再び彼にお金を要求してきた。拒否すると、領主はガジュラージを捕えて手を縛り、火をつけると脅した。しかし、末代子孫のためのお金を渡すことはできないと、ガジュラージは言い張った。領主はあきらめて彼を解き放った²³⁾。

ガジュラージ・パラクの名は『チュールーの郷土史』にも記述があり、1855年にチュールー城を占拠したイーシュワルシン (Ishuwalsigh) が彼に金品を要求したと記されている。同じ年にイーシュワルシンはピーカーネール軍に制圧され、チュールーは再び直接支配領になった[Agrawal 1974: 296]。ガジュラージの話には、チュールーにおける在地権力の衰えを読み取ることができる。一方、財力をつけた商人の力が領主の要求を拒否できるまでに高まっていたと考えられる。19世紀後半はチュールーからの移出者数が最も多かった時期にあたる。英領で成功した商人たちは「故郷」における壮観な邸宅の建築に象徴的投資を向け始めた。

この時期に建てられたチュールーの「スラーナー・ハヴェーリー」は、5階建ての大きな建物に1,111個の窓を持ち、この地域で最大の高さや窓の数を誇る(写真2)。カルカッタで財をなしたヴィッドウチャンド・スラーナー (Vidhchand Surana) によって1870年代に建てられた。彼の息子はハウラの行政長官を務めていた。この邸宅には、窓の開閉専用の使用人がおり、一人の男が朝からスタートして最後の窓を開ける頃には夕方になっていたと語られている。20世紀初頭に造られた邸宅には、西洋風の建築様式も採り入れられた。「マールジーの部屋」と呼ばれる壮大な邸宅は、イタリア・シチリアの町を想起させるデザインで、



写真2



写真3

数多くの細長い円柱の柱に女性の像が彫られている（写真3）。ピーカーネール藩王国の議員を務めていたマールチャンド・コターリー（Marchand Kothari）によって1925年に建てられ、娘の結婚式の会場となった。その後は英政府役人のゲストハウスとして使用された。これら19世紀後半以降に建てられた邸宅は、居住や商売や防御の機能よりも、富や地位を表現する見世物としての機能をより重視するようになったといえる。

4-2. ロカリティとのつながりを表現する装置

故郷を遠く離れた土地で成功した商人たちが地位を示し、名声を獲得するのに最もふさわしい機会が結婚や葬儀という家族儀礼であり、そこに莫大な支出がなされた²⁴⁾。ハヴェーリーは娘の結婚式の機会に建築され、装飾され、修復された。外側のパイタクから内側の部屋へとつづく入口は、最もすばらしい装飾がなされている部分であるが、そこを見れば邸宅が結婚儀礼でどれほど重要な役割を担ったのかを知ることができる（写真4）。

入口には、細かな彫刻がほどこされた木製の枠が取り付けられ、上部のニッチには、ガネーシャ神像が埋め込まれている。ガネーシャは二人の妻、リッディーとシッディーを左右に伴っ



写真4

て、内部へつづく入口を守っている。これが商人邸宅の特徴であり、戸口上部には多くの場合、複数のトーラン (toran) がつけられている。トーランは木や金属でつくられた板で、愛のメッセンジャーであるオウムのデザインが施されている。トーランの数が、その家で行われた娘の結婚式の数を表す。結婚式の日、花婿が入口に到着すると、親族の女たちが彼を追い払うシーンが演じられる。花婿が葉の茂った小枝で戸口のまぐさに触れると、彼によって征服がなされたとされ、中に迎え入れられる。トーランは戸口上部にその瞬間からずっと固定され、結婚式の記憶を刻む。邸宅はこうした儀礼を行う大舞台として、新興商人が故郷において富を名声に転換する装置となった。

しかし、建築物によって移動商人が獲得しようとしたのは名声だけではない。ほとんどの邸宅に実際にはそこに暮らしたことがない先祖の名前がつけられており、邸宅は自分自身や家族のためよりもむしろ、先祖のために、先祖の名前が人々に記憶されるために造られたと考えられる。邸宅は家族儀礼の舞台となり、儀礼では先祖とのつながり、カーストのメンバーシップ、地域の人々との関係に光が当てられた。これらロカリティとのつながりを演出するために邸宅は建造された。言い換えるなら、祖先の邸宅を建築することは、移動商人にとって「故郷」を創出することであり、創造された「故郷」に彼らのアイデンティティを位置づけることであった²⁵⁾。

5. むすび

5-1. 移動する人々にとっての「故郷」

マールワリーの歴史を見ると、英直轄領へ移住する以前から常に彼らは移動することで生計を立ててきたことがわかる。チュールーのポダール家の事例では、この家族の祖先は16世紀にファテールからチュールーへ移住した。移住の理由は明らかではないが、姓のポダールはポーターダール(金庫を持つ者)を意味するところから、おそらく彼はファテールのムスリム支配者の金庫番であったと見られている[Timberg 1978: 138]。移住の歴史はさらに以前に遡ることができる。ポダールはアグラワールに属し、シェーカーワティー地方で最も有力かつ多数派の商人カーストである。アグラワールはもともとハリヤーナーを起源とし、ムスリムの侵攻から逃げて南へ下ったとも言われているが、交易の要所に位置するラージャスターンに魅かれてやって来たとも考えられる。

移動や移住は商人にとって自然なことであり、一般的であった。彼らは特定の土地に固執することにはなかった。19世紀まで彼らは土地を所有することはなく、不動産に投資することもなかった。商人たちが大きな邸宅を建てることは許されなかった。彼らのリソースは、交易ネットワークやカーストや親族の結びつきであり、それらが移住を容易にしていた。彼らは商機のあるところに滞在し、支配者の搾取が限界をこえたとき、あるいは商売環境が悪くなったとき、別の場所へ移住した。まさにこのフレキシブルさが商人の本質的特徴であり、ロカリティとの関係の結び方が明らかに定住者とは異なっている。

土地や水が主要なリソースである農業者にとって、故郷は特定の土地との具体的つながりに由来するのに対し、商人にとって「故郷」は、ロカリティとのつながりを創り出すという行為の中にある。支配者に贈り物をする、建物を建てる、儀礼を行う、寄付をするなどの象徴的投資によって、移動商人たちはこれまでも絶えず意識的にロカリティとの関係を創り出してきた。

18世紀後半から、チュールーのポダール家のように、在地領主を超える権力を持つ商人家族がいくつか出てきた。19世紀になると大多数の商人が英領インドに移住して財を成した。移住先においてマールワリー商人は厳格な菜食主義を守り、着飾ることもなく、質素な生活をおくっていた。しかし、こうした彼らの禁欲的生活は自己放棄の思想と結びつくわけではなく、カルカッタでの稼ぎは「故郷」へ送られ、一部が象徴的投資に向けられた。各々の建造物はライバル家族によって建てられた別の建造物と優劣を争い、最終的には外壁が絵で埋め尽くされた。「故郷」は商人の地位が競われる場所となった。

かつて商業町は、商売の拠点として重要な機能を果たした。その後、移住形態が変わり、実際に商業町に住む人がなくなった後も、しばらくの間「故郷」の商業町は儀礼の舞台として、ロカリティとのつながりを表現する場として特別の役割をもち続けた。しかしながら、移住先で生まれた第二世代になると、徐々に故郷を訪れる機会は減り、第三世代では結婚式を故郷で行うことも少なくなった。シェーカーワティーにおける新しい邸宅の建築は1930年代を最後に止んだ。こうした変化に

ついて、ハードグローブはラージャスターンがマールワリーの自己認識にとって重要ではなくなったという説明をしている²⁶⁾。最後に、近年のマールワリーの「故郷」との関係について筆者の見解を述べ、まとめとする。

5-2. 「故郷」の変容

2010年夏及び2011年春にカルカッタ在住のマールワリーに行ったインタビューでは、今も同郷の移住者や地元親族を介して、「故郷」の寺院や学校や病院などに寄付を行っているという人が多く見られた。しかし、実際に「故郷」の邸宅を訪れたことがある者は少なく、年配者の中に年に一度か二度「故郷」の商業町を訪れるという者を見つけることができるのみだった。その際には必ず地元の人に管理をまかしている邸宅に立ち寄るといえるが、傷んだ邸宅を修繕することもなく、新しい投資は行われていない。財産権を持つ子孫の人数が増え、邸宅の管理や処分について意見の一致を見るのが難しくなっているためという。中には売却され、ホテルに転換された邸宅もあるが、係争中で立ち入りが禁じられているものも多々ある。

「先祖の邸宅」との関係が失われつつある一方で、興味深いことに、多くの家族が現在も息子が生まれると、最初に髪を切るジャドゥラーという儀礼をラージャスターンで執り行っている。この儀礼は、従来は「故郷」の邸宅で行われたが、現在はクラン女神の寺院で行われている。例えば、カルカッタのポロバザールで男性の結婚式用衣服を商うガネリワラー (Ganeriwala) の家族は、1歳になる少年のジャドゥラー儀礼のために、2010年8月に少年と両親と祖父母がラージャスターンを訪れた。少年の曾祖父は、ラージャスターンのラタンガル出身であり、そこには今も一族の邸宅がある。しかし、今回の旅でラタンガルを訪れることはなかった。この家族の姓ガネリワラーが示すように、彼らの祖先はラタンガルから数キロ離れたガネリ村に出自を持つとされ、そこにリネージ神の祠がある。また、ガネリワラーはシンガル (Singal) というクランに属しており、チャタルブージ・マターマイー (Chatrbhuja Matamai) と呼ばれるクラン女神の寺院がファテールにある。今回のラージャスターン訪問では、この家族はガネリ村のリネージ神を参拝し、その後にファテールのクラン女神の寺院で子供の散髪儀礼を行った。

この事例から、今日のマールワリーにとって「故郷」とのつながりの中心は「先祖の邸宅」から「リネージ神やクラン女神の居処」へと変化しているといえる。最近、上述のガネリワラーの年配男性は、全インドに散らばる一族の成員リストを作成した。そして、一族の会合をリネージ神の祠があるガネリ村で定期的に関心することを計画している。今や先祖の邸宅よりも、クランやリネージのメンバーシップ (遠い祖先を共有する人々とのつながり) がアイデンティティ構築にとって重要になっていると考えられる。

移動商人にとっての「故郷」は、3つのレベルを考える必要がある。第1に、生まれた場所や暮らした場所という記憶の中の故郷、第2に人や建物との具体的な結びつきをたどることができる歴

史的故郷、第3にリネージ神やクラン女神を共有する人々の中の神話的故郷である。今やラージャスターンとの結びつきは、具体的な人物や場をともなった記憶や歴史ではなく、遠い祖先とのつながりを示す神話になっていることを指摘したい。ハードグローヴのように「ラージャスターンがマールワリーにとって重要性を失った」と捉えるのではなく、神話的故郷として異なる重要性を持つようになっていると思われる。

本稿では、移動商人マールワリーにとっての「故郷」の意味や役割について考察した。彼らは移動を繰り返す中、特定のロカリティとのつながりを創り出すために様々な象徴的投資を行ってきた。税や寄進や慈善事業など様々な形で町に投資することにより、町との関係を創り出してきた。先行研究では、商人による寺院建設や慈善活動は、宗教的利益や社会的名声の獲得と結びつけて理解されてきた。例えば、スーラト市の商人の贈与ポリティクスを分析したヘインズは、ムガル支配者への貢物から、寺院建築などの宗教的寄付、近代の慈善事業、そして独立運動への経済的支援までがすべて名誉の獲得という一貫した論理でおこなわれていると論じる [Haynes 1987]。

しかしながら、本稿で扱った移動商人にとっては、豪華な邸宅や公共建築物への投資は、ヘインズが論じたような名声獲得、その結果としての商売の成功を最終目的とするだけではない。土地とのつながりを持たない彼らにとって、建物や投資行為自体がロカリティとのつながりを明示化する装置であり、町を離れた後には、そこが「故郷」であることを示す重要な役割を果たしてきた。移動商人にとって「故郷」は、象徴的投資という方法で創り出されることが明らかになった。

註

- 1) 本稿では、マールワリーを指して一般的に用いられる「商業移民」(migrant traders)ではなく、「移動商人」(mobile merchants)の語を用いる。「商業移民」が出身地(アウト)と移住先(イン)という一方向の移動を意味しがちであるのに対し、「移動商人」を用いることにより、A地点からB地点、そしてC地点へという移動の継続性を表現するためである。マールワリーの移動の継続性については、本稿の第3章、4章を参照。
- 2) ティンバークによれば、60年代にはインド経済の近代セクターにおける資産の半分以上をラージャスターン北部に出自をもつ商人カーストの人々が支配していた [Timberg 1978: 15]。1986年の推計では、ピルラー、シンハーニヤ、モディー、バングール(すべてマールワリー財閥)の4つで、インドにおける上位10商社の総額資産の3分の1を占めていた [Dubashi 1996 cited in Hardgrove 2004: 3]。
- 3) ティンバークは、マールワリーの特徴として、合同家族による財の管理システム、全国にひろがる信用ネットワーク、投機精神などを指摘し、これらの組織や能力をマールワリーがもつのは、彼らの伝統的職業が交易であることに由来すると述べている。「マールワリーは信用取引とリスク管理に慣れており、それらに適応した制度や態度を発展させてきた」 [Timberg 1978: 40]。
- 4) 例えば、イギリス統治領での稼ぎを藩王国に送ることで税の支払いを逃れたこと、ラージプートとの密接な関係によって移住初期の段階でムスリム支配下の北インドで軍の兵糧調達を任せられたことなど、マルコヴィツは、マールワリーの成功の背景にある歴史的状況を明らかにした [Markovits 2006: 145]。
- 5) 本稿では、19世紀におけるマールワリーの移住について論じるため、地名をカルカッタに統一する。本稿のもとになった聞き取り調査は、2008年1月と8月にチュールで、2010年3月と8月、2011年3

月にカルカッタで実施した。その他、2006年と2007年、2012年に短期でシェーカーワーティー地域各地の商業町を訪問し、情報を集めた。

- 6) シェーカーワーティーの商業町出身の著名なマールワリーとして、例えば、ピラーニーのビルラー、ピサウーのシンハーニヤー、チラワーのダールミヤー、マンダーワーのサラーフ、ドゥーンロードのゴエンカーなどを挙げることができる。
- 7) 17世紀には、すでにナゴールのジャガト・セートなどいくらかの商人がベンガルやビハールに生計の糧を求めて移住していた。しかし、確固とした移住の流れが始まったのは19世紀初頭である。タクネートは、シェーカーワーティー商人が英領インドに向けて旅立った要因を次のように説明する。シェーカーワーティー地方は、中東と北インドと中国をつなぐ長距離陸上交易の主要ルートが通過しており、15世紀頃から各地に商業町が形成されてきた。しかし、19世紀にはムガル帝国が衰退するにつれて、交易路の安全性は失われ、陸上キャラバンはマラーターやピンダリーの攻撃を受けるようになった。また、在地領主による略奪や高額な税の要求にも商人たちは苦しめられた。商人から借りた金を支配者が踏み倒すこともしばしばおきていた。1818年にすべての藩王国が英保護下に入ると、物品入市税が課せられるようになり、交易はますます衰退した。こうしたラージャスターンにおける商売環境の悪化に対し、英直轄地に新しい商機が開かれた。1813年に東インド会社の特許法が改正され、東インド会社によるインド交易の独占が廃止されると、新しい港町ボンベイやカルカッタに数多くの英貿易会社が設立された。イギリス人経営者は、材料を農村部から買い付け、英製品をインドで商うためのローカル・エイジェントを必要とした。英政府は直轄地にインド商人を呼ぶために保護や便宜を与えた [Taknet 1990: 11]。
- 8) シヴナラヤン・ビルラー (G.D. ビルラーの祖父) はボンベイへの旅の困難について次のように記している。「ピラーニーからラクダでアーメダバードにつくのに20日かかった。ラクダの旅は全くの拷問であった。旅はサンガという集団でおこなわれた」。ラメーシュワール・タンティヤーの手記によれば、「道中、強盗やジャングルや河や野生動物などあらゆる危険が待ち構えていた。10～15歳で旅に出て、20年、25年後に国に戻った。旅の途中で亡くなっても、家族が知らないこともあった」 [cited in Taknet 1990: 13-14]。
- 9) ティンバークによれば、例えば、シヴナラヤン・ビルラーが最初にブローカーの仕事を得たのはターラーチャンド・ガネシャムダース (Tarachand Ghanshyamdas) のカルカッタ・オフィスであった [Timberg 1978: 146]。ラムダット・ゴエンカー (Ramdutt Goenka) は1830年代にミルザープルにあるセーワラーム・ラームクリダース (Sewaram Ramrikhdas) の事務員として雇われた。彼は繊維商人として自らが成功しただけでなく、その後は多くの同胞に雇用を与えた。その内の一人、マンダーワー出身のナトゥーラーム・サラーフ (Nathuram Saraf) は、後にパーサー (basa) という共同住居を新参者のために開いた [Timberg 1978: 187]。
- 10) 1964年の企業独占調査委員会の報告書によれば、37の北インド系財閥のうち10がマールワリー財閥であり、それら10財閥によって75億ルピーの資産 (総資産額の38%) が統括されていた。また、同委員会はマールワリーが所有する大企業の名前を147挙げており、そこには23のジュート工場、34の綿織物工場、11の製糖工場、8のセメント工場などが含まれていた [Timberg 1978: 9-11]。
- 11) 例えば、サングラームシンの次の領主、ギーラトシン (Thakur Ghilatsingh 在位 1741-1754) の時代には、ギールサーガルというため池が造られている。その次の領主ハリシン (Thakur Harisingh) の時代の建造物には、シヴァ寺院 (Mangleshwar Mahadev Mandir) やタクネートという商人が建てた8柱の記念碑 (Ath Khanbe Chatri) がある。領主シヴシン (Thakur Shivsigh, 1783-1814) の時代には、チュールー城内の寺院建設や、1790年にマハーシュワリー家族によって建てられたサティー寺院 (Mardon ka mandir) を挙げることができる。
- 12) チュールー在住のスニル・アグラワール氏へ2008年8月に実施したインタビューにもとづく。彼によれば、領主は地下道を通してしばしばボダール家を訪問していた。また、通路は避難路の役割も果たしていた。筆者は、ラクシュマンガル (Laxshmangarh) の町でも、領主の城と町の主要商人のハヴェーリーとの間に地下道があったという同様の話を聞いた。

- 13) ポダール一族がチュールーを出て行った理由には諸説がある。チャタルブージから6世代目子孫の一人、ハヌマーン・ポダール(1921-)氏へ2008年8月に実施したインタビューによれば、領主とポダールとの諍いは税の問題ではなかった。原因は日常的なたわいない事であり、商人が町から出ていくことはこの当時しばしばあった。チャタルブージは52人の家族全員をつれてチュールーを離れた。その当時、商人たちは小さな家に住んでおり、家財道具も少なかったので、移住はたやすかった。
- 14) ラームガルの繁栄ぶりは、19世紀後半のカルカッタにポダール一族の会社が数多く存在したことから推測できる。ティンバークによれば、ソージャラーム・ハルダヤル(Sojiram Hardayal)、アナトラーム・シヴブラサード(Anatram Shivprasad)、ハルサーマル・ラームチャンドラ(Harsamal Ramchandra)、セーワラーム・カールラーム(Sevaram Kaluram)、ジョーハーリーマル・ラームラール(Johurimal Ramlal)など、すべてがラームガル出身のポダール一族の会社であった。これらの親会社がターラーチャンド・ゲルシャーマル(Tarachand Gursahaymal)、後のターラーチャンド・ガネシャームダースであり、チャタルブージの息子ターラーチャンドが経営していた。この会社は銀行業や金製品の卸売業、毛織物の輸出業、保険業という父親の代からのビジネスに加えて、マルワーで阿片や綿花の商売をスタートさせた[Timberg 1978: 139]。ターラーチャンド・ガネシャームダースは1860年から1914年までの間、インド最大の会社であった[Timberg 1978: 133]。
- 15) チュールー領主の敗因について、アグラワールはポダールやその他の町の商人たちがピーカーネール藩王側についたことを挙げている。「商人たちは領主シヴシンに腹を立てており、このためチュールー城への食料や兵器の供給が断たれた」[Agrawal 1974: 259]。この戦いで領主シヴシンは自害した。その息子、プリットヴィーシン(Pritvisingh)が1818年に再びチュールー城を占拠したが、同年にピーカーネールは英政府と条約を結んでおり、英宗主権を認める代わりに、藩王が支配地域において現状を維持することを支援するという約束がなされていた。ピーカーネール・イギリス両軍がチュールーの反乱を鎮圧し、プリットヴィーシンは追放された。
- 16) チャタルブージには3人の息子、ジンダーラームとタールチャンドとジョーハーリーマルがいた。ジンダーラームの3人の息子のうち、ミルジャーマルとナーガーラームの2人がチュールーに戻り、それ以外の家族はラームガルにとどまった[Agrawal 1974]。
- 17) ポダールの証文の中でも、他に類をみない高額の貸し付けは、V.S.1884年(西暦1827年)バードラバド月黒分2日にピーカーネール藩王に貸し付けた400,000ルピーである[Agrawal 1980: 6]。
- 18) ハジャリーマルから5世代目の子孫、ダウンガルマル・コターリー氏への2008年8月のインタビューで次のような話を聞くことができた。「ある日、ポダールが雨の予測の賭けで、コターリーに負けて財産を失った」。この語りはポダールからコターリーへの時代の移行を象徴しているように思われる。
- 19) 上記、ダウンガルマル・コターリー氏(注18参照)へのインタビューにもとづく。
- 20) カルカッタの銀市場で名を馳せたヴィシュヌダーヤル・ジュンジュンワラー(Vishnu Dayal Jhunjhunwala)によれば、マルシーサル村出身の彼の祖先も領主に脅されて村を離れたことがある。しかし、数年後に領主に懇願されて再び村に戻ることになった。「故郷への帰還は商人の勝利を意味し、家族にとって非常に名誉な出来事であった。それは村人にとって単に重要な出来事であっただけでなく、特定の年や人物を記憶するために将来において常に言及され続けた」[Jhunjhunwala and Bharadwaj 2002: 18]。
- 21) 上記、ハヌマーン・ポダール氏(注13参照)へのインタビューにもとづく。
- 22) 郷土史博物館に収蔵されているポダール・コレクションの詳細な研究が、地元の郷土史家ゴービンド・アグラワールによって行われており、本稿でも参考にした。
- 23) ガジュラージ・バラクの6世代後の子孫、ライチャンド・バラク氏への2008年8月に実施したインタビューにもとづく。
- 24) 結婚式への莫大な支出の一例として、1879年にファテーブルのプーランマル・シンハーニヤールが8歳でラームガルのジャイナラヤン・ポダールの娘と結婚式を挙げた際には、ラームガルへの花婿行列には、

- 参列者 2000 人、象 500 頭、馬と牛とラクダをあわせて 800 頭が加わった。このような途方もない浪費はめずらしくなかった [Cooper 1994: 39]。
- 25) ハヴェーリー邸宅に描かれた壁画のテーマを分析したハードグローヴも、同様の指摘を行っている。商人たちは彼らの祖先やロカリティとのつながりを確実なものとし、彼ら自身のアイデンティティを創り出すためにハヴェーリーを建造した。彼女によれば、壁画のテーマは、イギリス支配と結びつく植民地近代のイメージから、神話やバクティと結びつく伝統的イメージまで様々であるが、商人たちは意識的に近代ヨーロッパ文化のシンボルを描くことで、コスモポリタンな外観を表現する一方、ルーツのなさを顕わにする潜在的危険を軽減するために、宗教的敬虔さを表現する絵を描き、この土地の者としてのアイデンティティを維持しようとした [Hardgrove 2004: 96]。
- 26) 1930 年代以降に商人邸宅が重要性を失った理由をハードグローヴは以下のように説明する。この時代にはマールワーリー商人にとって、在地のラージプット支配者との権力争いは重要でなくなった。むしろ彼らは国民会議派に関わり、民族闘争に参加するという新たな舞台を見出していた。その結果、ラージャスターンは彼らの目にはもはや行動、アイデンティティ、記憶のいずれにおいても重要な場ではなくなった [Hardgrove 2004: 107]。

参考文献

- Agrawal, Gobind, 1974, *churu mandal ka shodhpurna itihās*, churu, rajasthan: lok sanskriti sodh sansthan nagarshri.
- Agrawal, Gobind, 1980, “churu ka potedar abhilek sangraha,” *Maru Shuri*, pp. 6–36.
- Cooper, Ilay, 1994, *The Painted Towns of Shekhawati*, New Delhi: Prakash Books India.
- Hardgrove, Anne, 2004, *Community and Public Culture: the Marwaris in Calcutta*, New York: Columbia University Press.
- Haynes, Douglas E., 1987, “From Tribute to Philanthropy: The Politics of Gift Giving in a Western Indian City,” *The Journal of Asian Studies*, 46-2, pp. 339–360.
- Jain, Lakshmi Chandra, 1929, *Indigenous Banking in India*, London: Macmillan and Co. Limited.
- Jhunjhunwala, Vishnu Dayal, and Arvind Bharadwaj, 2002, *Marwaris: Business, Culture, and Tradition*, Delhi: Kalpaz Publications.
- Lavania, B. K., D. K. Samanta, S. K. Mandal, and N. N. Vyas, 1998, *People of India, Rajasthan*, Vol. 38, Suresh Singh (ed.) *People of India, State Series*. Mumbai, India[S.I.]: Ramdas G. Bhatkal for Popular Prakashan, Anthropological Survey of India.
- Markovits, Claude, 2006, “Merchant Circulation in South Asia (eighteenth to twentieth centuries): The Rise of pan-Indian Merchant Networks,” in Claude Markovits, Jacques Pouchepadass and Sanjay Subrahmanyam (eds.), *Society and Circulation: Mobile People and Itinerant Cultures in South Asia, 1750–1950*, London: Anthem, pp. 131-162.
- Modi, J. L. (ed.), 2005, *Census of India 2001: Rajasthan Administrative Atlas*, New Delhi: Government of India.

Sehgal, K. K., 1970, *Rajasthan District Gazetteers: Churu*, Jaipur, Directorate of District Gazetteers, Govt. of Rajasthan.

Sharma, Girija Shankar, 1988, *marwadi vyapari, bikaner ke sandarbha men*, Bikaner: Krishna Jansevi and Co..

Taknet, D. K., 1990, *māravārī samāja*, jayapura: kumāra prakāśana.

Timberg, Thomas A., 1978, *The Marwaris, from Traders to Industrialists*, New Delhi: Vikas.

Wacziarg, Francis and Aman Nath, 1982, *Rajasthan: the Painted Walls of Shekhavati*, New Delhi: Vikas Publishing House.